

2018 年度事業計画

1. 2017 年度を振り返る

創立 61 年となった 2017 年度、前年度の 60 周年事業を通して改めて実感した日本フィルの特徴、すなわち「人の心の温かさや心の震がわかる楽団」として成長、発展してきた歴史＝日本フィルの遺伝子を大切に、さらに活発に事業を行った。

従来 of 活動の三本柱である「オーケストラ・コンサート」「エデュケーション・プログラム」「リージョナル・アクティビティ」、また「被災地へ音楽を」の取り組みはいずれも、日本フィルの遺伝子に基づき互いに連携しあう事業である。これらの有機的・積極的な取り組みとバランスが、現在の日本フィルの個性の確立に繋がっていると見える。

2016 年度から継続して実施した「創立 60 周年記念事業（～2017 年 5 月末）」では、首席指揮者ピエタリ・インキネンによる楽劇「ラインの黄金」へのチャレンジがたいへん高い評価を得るなど、日本フィルの芸術的水準に対する評価が確立した。また、小林研一郎による特別演奏会は天皇皇后両陛下のご臨席のもと、マエストロの喜寿を聴衆とともに喜ぶ機会を得た。

また「がん患者さんと歌う第九」（指揮：山田和樹）では、1 年にわたるがん患者およびその関係者との「第九」への想いが演奏にも力強く反映され、長く記憶に残る公演となった。

他の活動では、芸術性と社会的な取り組み双方に注目が集まった。

「オーケストラ・コンサート」では、インキネンとのブルックナー、ラザレフとのグラズノフへの集中した取り組みなど、日本フィル指揮者陣との充実した公演とともに、下野竜也や広上淳一といった客演指揮者との公演でも特筆すべき成果を上げた。特に下野との 3 月定期では、難解な現代音楽を含みながら、物語性のある文脈に作品を連ねることで「わかりやすさ」をも演出、練り上げられたプログラミングと演奏が絶賛を浴びた。またかつて正指揮者を務めた広上とは東京・横浜の定期演奏会で共演。円熟した解釈と巧みな技術でオーケストラをリードし、ブラームスや R.シュトラウスといったロマン派作品の在るべき姿を堂々と構築した。指揮者陣との集中した取り組みの結果、客演指揮者との公演もまた、ますます充実の度を増したことが示された。

7 年目を迎えた「被災地に音楽を」の活動は 232 回を数えた。2017 年度は、本活動の一環として調査研究および青少年への取り組みが「平成 29 年度（2017 年度）文化庁・戦略的芸術文化創造推進事業」に初めて採択され、その活動はさらに一層羽ばたくときを迎えた。2018 年 2 月には同事業の成果報告会およびシンポジウムを開催、被災地の現状を音楽団体の立場から広く発信した。

2. 2018年度の経営方針

(1) 定款に定めた事業の目的

(目的)

第3条 この法人は、交響管弦楽の演奏を中核事業として、芸術文化の普及と振興を図り、わが国の音楽芸術の向上、ならびに国内外の文化の交流に寄与することを目的とする。

(2) 経営の二大目標

① 日本フィルは面白い—芸術性の追求・社会性の拡充

《芸術性の追求》

首席指揮者ピエタリ・インキネンをはじめ、個性豊かで充実した指揮者陣を擁する日本フィルは、各指揮者との个性的かつ集中した取り組みを中心に、演奏水準にさらに磨きをかけ、日本フィル・サウンドの確立に努める。

とりわけ首席指揮者ピエタリ・インキネンとは、ワーグナー、メンデルスゾーン、シューマンといった、オーケストラ・レパートリーの中心たるドイツ・ロマン派音楽への深い取り組みを続け、深く重い響き、自発的サウンド作り等によりオーケストラの個性をより明確に打ち出す。

桂冠指揮者アレクサンドル・ラザレフとは、1956年より続く定期演奏会が700回の節目を迎える(2018年5月)ことを記念し、ストラヴィンスキーの劇音楽《ペルセフォーン》の日本初演を行い、日本の聴衆に新たな作品の世界を提示するなど、引き続き上質の演奏によるロシア音楽の紹介を継続する。

正指揮者山田和樹とはフランスを中心とした中央ヨーロッパの作品と邦人作品を含むプログラミングで個性ある公演づくりを継続する。また、桂冠名誉指揮者小林研一郎、ミュージック・パートナー西本智実とも、個性に応じた豊かで幅広い音楽を聴衆に提供し、演奏水準の一層の維持向上を目指す。

《社会性の拡充》

日本フィル固有の「温かさ」を通じて、より多くの人へ、音楽の持つ力を伝え、芸術文化の普及に努める。2018年度は海外へその場を広げ、11月に韓国公演(2公演、指揮：大植英次)を行う。また2019年4月のヨーロッパ公演(指揮：ピエタリ・インキネン)の準備を進める。

2017年度、「被災地に音楽を」事業の一部が文化庁の委託事業となり、被災地における取り組みは新たな局面を迎えた。本事業の報告会・シンポジウムにおいては、コミュニティに対する今後の事業展開に関し、各界からも意見・提言を受けた。これらをもとに、事業の新たな局面を切り拓いていく。

また、テクノロジーとの共生により、「オーケストラの奥深い面白さ」をより広く伝える手法についても、事業を継続実施しつつ研究開発を深めていきたい。

② 芸術家を大切に—財政強化、処遇改善

財政基盤の確立は日本フィルの最大の課題であるが、経営努力により、収益は公益財団法人移行後も黒字が確保され、正味財産は確実に積みあがっている。(2017年度末136百万円見込み)

2018年度は、芸術性・社会性を追求する事業の活発化により事業規模が拡大する。(通常13億円→14億円)

国・自治体からの委託事業としての収入は拡大するほか、必要資金手当てが必要な事業に対し、国・民間の助成金の拡大が見込める。一方、少々伸び悩んでいる入場料収入、法人寄付金・協賛金の対策が急がれる。

併せて本年度は韓国公演、来年度はヨーロッパ公演を計画しており、これを見据えた資金計画は喫緊の課題である。尚、長期重要課題である“楽員の処遇改善”については、役員検討会を招集し実現への足掛かりをつける。

(3) 事業の基本方針

2018年3月7日「文化芸術推進基本計画(第1期)」が閣議決定され、文化芸術政策の目指すべき姿や基本的方向性が初めて示された。これらを通し、芸術文化の本質的価値に加え、社会的・経済的価値が果たしうる役割に関心が集まり、加えて2020年オリンピック・パラリンピック東京大会の開催に向け文化による成熟社会の醸成機運が高まった。とりわけ、芸術文化の持つ社会包摂機能への関心がますます高まっている。

こういった機運を受け、日本フィルは創立60周年を期に掲げた「オーケストラの面白さと感動の共有」というスローガンのもと、知れば知るほどわくわくする、奥の深いクラシック音楽の面白さと感動を、あらゆる人々へ、世代へ、地域へ、そして世界へ届けることを願い、活動をいっそう拡大していく。

活動の三本柱である「オーケストラ・コンサート」「エデュケーション・プログラム」「リージョナル・アクティビティ」に加え、東北と熊本における「被災地へ音楽を」の活動を継続し、それらを「新たな挑戦」へと繋げていく。

芸術文化の社会における役割の拡大がますます期待されている現在、日本フィルが多くの皆様のご支援により獲得した芸術的成果と専門的知見を活かし、＜音楽の力＞をさらに広く日本各地へと届けていく。

2018年度は具体的に以下の重点方針に掲げていく。

① オーケストラの面白さと感動を、より多くの人に

三本柱の活動推進

(オーケストラ・コンサート／エデュケーション・プログラム／リージョナル・アクティビティ)

オーケストラ・コンサートの特筆すべき公演としては、「第 700 回東京定期演奏会」（指揮：アレクサンドル・ラザレフ、曲目：ストラヴィンスキー「ペルセフォーン（日本初演）」「韓国公演（指揮：大植英次、2 公演）」を予定している。

《ペルセフォーン》は、ギリシャ神話をもとに文豪アンドレ・ジイドが書き下ろした台本、大編成のオーケストラ、テノールの歌で進行するメロドラマで、水の精や亡霊たちの合唱も加わり、春と農耕の女神、ペルセフォーンが語る壮大な音楽が特徴である。新古典主義時代のストラヴィンスキーが遺した隠れた傑作を日本の聴衆に周知したい。またシンプルかつ複雑なこの作品を通じて、「力」だけでは通用しない緻密さや繊細さを、オーケストラが実現させ、ラザレフと日本フィルが続けてきたロシア音楽のオーセンティシティをさらに強く日本の音楽界に届けてゆきたい。

韓国公演は、現地で毎年開催される 2 つの音楽祭へ「アジア代表」として日本フィルが招聘され、出演するものである。日本フィルとしては初の韓国公演となるこの機に、日本人作品（外山雄三：管弦楽のためのラプソディ）や韓国人ならびにフランス人ソリストを迎え、音楽を通した真の国際交流、またアジアにおける日本のオーケストラの発信、日本フィルの活動の国際的展開、などその意義は大きい。

オーケストラ・コンサートにおいては常に質の向上を意識するとともに、社会の要請に応じ、また社会へ文化団体としての連携を呼びかける、社会の一員としての主体性と機動力を持った実施体制の構築に努める。

② 「被災地に音楽を」新局面、コミュニティと歩むオーケストラの可能性拡大

7 年間で 232 回を数えた東北大震災被災地への訪問活動を、今年度も積極的に継続するとともに、コミュニティと芸術団体の新たな可能性を追求していく。

被災された地域への取り組みを通して〈音楽の力〉を実感し、「音楽家は何ができるか」を自問自答しながら広げてきた活動の記録を《被災地に音楽を》レポートとしてまとめた。（2017 年 3 月発行）。また 2017 年度には、文化庁委託事業の一環として、6 年間の活動を外部評価いただいた。これらを通じて、被災地において音楽団体の果たすことのできる社会的役割の変化と新たな可能性を見出すことができた。

2018 年度も引き続き、人々と寄り添う団体としての日本フィルの存在を皆で確かめつつ、新たな可能性の要請に応じていく。また、2016 年 4 月 14 日発生した熊本地震被災地への活動も「熊本日本フィルの会」および現地関係者との協同のもと継続していく。

これらの活動を通し、「コミュニティと寄り添うオーケストラ」のありかた、また発展について、①新たな「参加」の仕組み ②音楽家や演奏団体の役割の拡大 ③オーケストラが社会において果たすべきこと といった視点を中心に、ワークショップなどの手法もより積極的に開発しながら、コミュニティとの関係づくりによってオーケストラの可能性を拡大する将来像を作っていく。

③ 「日本フィルをもっと身近に」&新たなチャレンジ

日本フィルが培ってきた、聴き手や支える方々との暖かい交流を大切に継続しつ

つ、新たな取り組みにも積極的に取り組み、現代社会の姿に呼応して生の音楽の魅力を共有する輪を一層広げていく。

◎テクノロジーを活用したコンサートの魅力発信

テクノロジーを活用し、新たな手法、新たな切り口で、オーケストラのライブ性、一回性、身体性（人間らしさ）を失わないコンサートの魅力発信を試みる。

落合陽一氏（メディアアーティスト・筑波大学准教授）とのコラボレーションを開始、2018年度は、Vol.1として、室内楽公演による「耳で聴かない音楽会」（聴覚障害のある方を主な対象に、障害のあるなしに関わらず楽しめるコンサート）を開催。また Vol.2「日本フィル特別演奏会（仮称）」は、VR技術等を活用し、テクノロジーを用いて音楽の奥深い面白さを伝える試み。落合氏とのコラボレーションを長期継続し、テクノロジーを用いたオーケストラの社会性の拡充に努める。

◎オーケストラへのアクセスの拡大

・チケット施策

25歳以下対象の Ys 席・Ks 席、65歳以上対象の Gs 席、身障者割引、セット割引券等

・体感音響システム「ボディソニック」との連携。

・託児サービス等の継続。0歳から対象のコンサート実施等。

・Webサイトの充実やSNSの活用により、「面白さ」をリアルに伝える工夫。

・チラシの機能強化（QRコードで音源を聴ける、等）や映像での告知の工夫

◎温かい音楽の場づくり

・演奏会でのプレトーク・アフタートーク

・指揮者、出演者、楽員との交流（シーズンファイナルパーティー等）

◎「音楽中間層」へ向けた取り組み

・音楽を多角的に楽しむ工夫（作品の時代背景や他芸術との関連を紹介）具体化

◎音楽を必要とする人への取り組み強化

・ライブ録音の音源や映像技術等を活用した、オンライン上での交流の場や音楽を楽しむ機会の拡大に繋がる事業への研究を継続する。

3. 2018 年度事業計画案

(1) オーケストラ・コンサート

2018 年度は主催 85 回、受託 67 回、合計 152 回のオーケストラ・コンサートを開催・出演予定である。今年度も演奏クオリティと企画力をより一層向上させ、日本フィルだけの唯一無二なサウンドづくりを一層推進する。

加えて室内楽編成での演奏機会も、従前と変わらず積極的に展開していく。室内楽においてもオーケストラ・コンサート同様、質の高さとプログラムの充実に務める。

・主催公演（共催含む）：

現代において「クラシック音楽」というジャンルが包含する音楽は実に多岐にわたっている。異なる地域・時代・スタイル・奏法等々、まさに多様性そのものと言ってもよいだろう。我々のこの点に着目し、網羅的・体系的なラインナップを組むことになった。聴き手にとっては文化の多彩な在り方を肌で感じる事の出来る絶好の機会といえるだろう。海外からのアーティスト招聘についても予算の許す限り積極的に行い、併せて日本滞在の外国人客の来場も積極的に促し文化的交流を図ってゆく。

我々が誇る指揮者陣を中心に芸術的意義のあるプログラミングを構築することはもちろんのこと、聴衆の嗜好や時代が求めている形を模索し、単なる迎合ではない知的好奇心を喚起する音楽を提供してゆきたい。また日本フィルならではの親しみやすさ、そして音楽の面白さを全面的にアピールし、社会への音楽文化波及、ひいては聴衆拡大に努めたい。

・受託公演（他団体演奏会への出演など、共催含む）：

主要なシリーズとして、友好提携を続けている杉並区、および杉並公会堂との共催による「杉並公会堂シリーズ」など区内各公演、「さいたま定期演奏会」（埼玉県）、「どりーむコンサート」シリーズ、（府中市）、「相模原定期演奏会」（相模原市）を継続する。このほか、杉並区小中学生を対象とした学校公演、15 公演に及ぶ文化庁主催「文化芸術による子供の育成事業（巡回公演事業）」、企業主催による公演などを予定している。また、11 回目を迎える山口県宇部市における企業主催公演は、音楽を通して企業・自治体とともに広く地域に貢献する典型的なモデルケースとなっている。

(2) エデュケーション・プログラム

日本フィルは歴史の中で、オーケストラをより多くの方に楽しんでもらう取り組みを、他の楽団に先駆けて行ってきた。その分野をさらに拡充する意味で現在、活動の三本柱の一つに「エデュケーション・プログラム」を置いている。44 年目を迎える「夏休みコンサート」や 12 年目となる「春休みオーケストラ探検」といったファミリー向けのオーケストラ公演がその中核を占めているが、それ以外にも室内楽によるア

ウトリーチ、対話型のコンサート、楽器体験やレクチャーなど様々な形で音楽を通じた学びの機会を作り出している。

中でも「英国エデュケーション・プログラムの第一人者」と称されるマイケル・スペンサーをコミュニケーション・ディレクターに迎えて実践を続けている音楽ワークショップは、参加者の主体性や、参加者同士のコミュニケーションを触発し、音楽を通じた様々な能力の開発が期待され、近年ますますその効果、用途が広がりつつある。オーケストラ公演との連携はもとより、美術館や企業との連携、さらに昨年度からは被災地でも積極的にワークショップを取り入れている。

またワークショップにおいてはマイケル・スペンサーの指導を受けた楽団員が、参加者の学びを促すファシリテーター役を務めてきているが、近年はその経験を活かして楽団員自らが独自のワークショップ開発や、対話型のコンサートの企画・演出を行い、ますます日本フィル独自のプログラムに広がりや深みが出てきている。

こうしたプログラムの充実に伴い、実施機会と体制をさらに充実させるためにも地域（拠点ホール、地方自治体、学校、企業、ディヴェロッパなど）や様々な事業パートナーとの関係構築を進めており、より多くの協働活動を推進していく。

① オーケストラによるエデュケーション

「夏休みコンサート」（首都圏、京都）「春休みオーケストラ探検」
「文化庁公演」「学校公演（音楽鑑賞教室など）」等

② 室内楽等によるエデュケーション

ローム協賛「小学生からのクラシック・コンサート」
「杉並区小中学校出張コンサート」「さいたまプライマリーコンサート」
「動物の謝肉祭」「兵士の物語」等

③ 音楽家との交流・演奏指導/音楽現場の体験

「終演後のこんだんかい」「クリニック」「職場見学」（中学生）
「インターンシップ」（大学生以上）

大学と連携した取り組み：高千穂大学、女子美術大学ヒーリング表現領域他
「60歳からの楽器教室」等

④ 音楽の奥深い面白さを深く知る取り組み

「日本フィルは面白い」他のジャンルとの協働等
「オーケストラたんけん隊」（ホールやオーケストラ演奏のガイドツアー）
「オケのテイキはおもしろい」（マイケル・スペンサーによる体験型講座）
地域づくりとの協働（「アークヒルズ音楽週間」など）
他のアート分野との協働（森美術館とのワークショップ「EYES & EARS」）

夏休みコンサートとの関連事業（相模原市文化会館とのワークショップ）
その他（講座やワークショップの開催）

(3) リージョナル・アクティビティ

地域との継続的な関係構築を通して、地域の方々との音楽を通じた心の交流をますます活性化させていきたい。

・杉並区との連携：

杉並においては、日本フィルの活動の 3 本柱すべてにおいて、区・公会堂との連携を深めてきた。1994 年に結んだ東京都杉並区との連携、また 2006 年開館の杉並公会堂との提携による活動を継続していく。

開館から 12 年を数えるランチャイズ・ホール杉並公会堂とは、これまでどおり「杉並公会堂シリーズ」ならびに「夏休みコンサート(受託)」をともに取り組む。

またホールと日本フィルの共催で《春休みオーケストラ体験(エデュケーション・フェスティバル in 杉並)》も継続開催していく。当事業はコンサートホールを軸とした総合的な教育プログラムであり、0 歳児からの子供を対象とするコンサートは日本フィルとしても唯一の主催事業である。オーケストラが主体となる子育て世代への事業の在り方は日本国内でも最も進んだ形と言える。

今後も杉並区民にクラシックの裾野を広げ、楽団の魅力を区民に伝える機会と位置づけ、連携の力による内容のより一層の充実を図りたい。

この他、小中学校や区内施設での出張音楽教室・出張コンサート、区民へのリハーサルの公開、区役所ロビーコンサートなど、区との友好提携に基づく事業を一層推進していく。

・九州公演：

44 年目を迎える九州公演は、自主参加の市民による実行委員会がボランティアで、日本フィルとともに公演の制作・運営を行うという、日本でも類を見ない運営スタイルで長年継続してきた。まさに、日本フィルの「リージョナル・アクティビティ」の大きな幹であり、また実行委員の方々は長年、公演の開催を通して日本フィルを支えてきた存在である。社会においても文化ボランティアの意義が認められつつある現在、《地域の実行委員が担い手となり、音楽を通じた地域との強い交流の実現・継続》というオーケストラのコミュニケーションのひとつのモデル、また、音楽を通じた地域活性化のモデルとして、九州公演は社会的注目を集めつつある。

しかしながら 40 年以上にわたりほぼ同じスタイルで継続している本事業は、地域により公立劇場等が主催する競合公演の増加や価格競争にさらされ、競合が激化している。また実行委員の高齢化のみならず、公演地によっては人口減、過疎化、等の地域課題も公演継続の大きな課題となりつつある。「九州公演モデル」を現代の実情に合わせた形にし、若年代を交えて“市民とともに歩む”日本フィルの財産としてますます発展させるため、日本フィルが地域課題に実行委員とともに取り組む仕組みの構築が急がれる。

2018 年度は 4 回目の九州公演登場となる藤岡幸夫氏を迎える。本年度も文化庁「劇場・音楽堂等活性化事業(劇場・音楽堂等間ネットワーク支援構築事業)」に申請中である。

・宇部公演：

宇部興産株式会社の地域貢献活動として開始された「宇部興産チャリティコンサート」。昨年、記念すべき10回目の節目を迎え、オーケストラ・コンサートの提供はもちろんのこと、病院への訪問コンサート、中学生対象のクリニックや合同演奏会、小学生へのリハーサル公開、さらには地元FM局による公演の市内生中継等の実施など、幅広い事業を継続的に行っている。第11回目となる2018年度は、首席指揮者ピエタリ・インキネンが宇部に初登場する。音楽を通じた地域貢献活動として、芸術性をはじめ日本フィルの活動の柱がすべて発揮される本公演を、今後も引き続き企業・自治体と一体となって積極的に展開していく。

・その他：

2018年度は、ローム株式会社主催・ロームミュージックファンデーションの助成によるロームシアター京都での主催公演（「夏休みコンサート」）の継続に加え、今年度に新たに行った、小学生を対象とした公演も継続して開催する。首都圏以外での公演可能性は、引き続き積極的に模索していきたい。

（4）「被災地に音楽を」（被災地におけるリージョナル・アクティビティ）

2011年3月11日の東日本大震災の被災者の皆様に音楽で励まして行こうと開始された「被災地に音楽を」の活動は、これまでに延べ232か所を訪問し（2018年1月末現在）現在も継続中である。2017年2月にはこれまでの活動を総括し、未来へとつなげるためのシンポジウム「コミュニティと生きるオーケストラ」を文化庁委託事業の一環として実施し、オーケストラの活動がますますコミュニティに必要とされていることが確認された。

震災から7年の時間が経ち、地域それぞれ異なる復興の様相に合わせて、必要とされる活動を現地の方々とともに行っていく。2018年度も文化庁委託事業として5か所でのプロジェクトを「コミュニティを活性化する」ことをテーマに推進する。

これからも音楽団体として、音楽家として、被災された方々に音楽を届けることで被災された方々に少しでも寄り添い励まし、「被災された方々のことを忘れない」「被災地の”今”を伝える」「音楽家に何ができるか」を問いながら、活動を続けていく。

（5）音楽の楽しみを深め、広げる活動（「温かさ」＋「新たな挑戦」）

「他の楽団と比べて暖かい」「身近だ」と言われる日本フィルの特徴をさらに活かし、音楽の持つ楽しみをより多くの方に広め、また、聴き手の皆様により深く音楽を楽しんで頂くため、様々な挑戦を行う。これまで行ってきた、コンサートに関連するサービスの提供、会員への特典イベントの提供などからより歩を進め、さらに音楽を楽しんで頂くために、多様な提案をしていく。

音楽を必要とする人々への取り組みは、学校・施設訪問、主催公演での託児サポート、ハンディキャップを持つ方のための割引や若い世代への割引料金の設定、聴覚障害のある方へのボディ・ソニック（体感音響システム）の充実等を一層強化していく。

またオーケストラ・コンサートでは、「日本フィルは面白い」をキーワードに、異文化、他ジャンルとの交流などにより、新たな視点から音楽の楽しみを提供する。具体的には、演奏会場でのプレトーク、アフタートーク、作品の時代背景や他の芸術との関連を紹介する企画、楽員との交流などを積極的に行う。

(6) 物品販売

・オリジナル CD（公益事業）、グッズ（収益事業）

コンサート会場に来られない方々にも演奏を届けるために、CD 等の録音物の制作と販売、普及事業を行う。インターネットを通しての配信等についても具体的に検討していく。さらに、多くの方々とのコミュニケーションを拓げるため、演奏会場内外での関連グッズの販売を行い、公演の余韻を楽しんで頂く。

2018 年度の制作予定アイテムは、演奏会のライブ録音 CD（日本フィル・レーベル）2 点、オリジナルTシャツ、オリジナルカレンダー、キティグッズ等である。

・音源活用

創立 50 周年事業としてデジタル・アーカイブ化された、日本フィルライブ演奏の活用、事業化に向けての検討を進める。

(7) 演奏に必要な調査・研究

・アンケート調査の実施：

演奏活動や、その運営のための資料として、聴衆を対象としたアンケート調査を実施する。

・音楽文化関係資料の収集：

演奏活動や、その運営のために必要な調査研究資料として、音楽・文化に関する図書・CD 等を数十点購入する。

・演奏音源活用のための調査研究：

著作隣接権等、演奏家の権利保護や音源活用のために必要な権利処理の調査を進め、著作権法の改定等にも対応していく。

・その他：

公益事業を継続、発展させるために必要な調査研究を継続的に行う。

(8) 情報発信

公益財団法人として必要な情報の社会的開示に努めるとともに、アニュアル・レポート（「こんな活動をしています」）等により、支援を頂いている個人・法人・団体などへの活動報告を積極的に行い、公益性と活動の意義を発信していく。

オーケストラ・コンサートにおいては、公演の多様な趣旨を的確に市場に届ける

とともに、「日本フィルを身近に」を趣旨として、演奏会場などの場、インターネットを活用した楽団情報や音楽情報の発信、聴き手との交流を深めていく。

情報発信ツールとしての、公式 Web サイトのリニューアルを実施。紙媒体を加え、日本フィルの活動をより効果的に活用できるよう工夫を重ねるとともに、Twitter、Facebook などの SNS や、メールマガジン「日本フィル NEWS」等の媒体を聴衆交流の場としてより積極的に活用していく。また、音源や映像による情報発信も強化していく。

「エデュケーション・プログラム」「リージョナル・アクティビティ」「被災地に音楽を」の各活動においては、活動ごとの特性を考慮した情報発信と対象の設定を工夫してゆきたい。

(9) サポートシステム

日本フィルは年間約 150 回のオーケストラ公演、年間 50 回を超える学校・施設訪問、創作ワークショップ等のエデュケーション・プログラム、全国各地で長年継続する地方公演や杉並区を本拠地としての活動等様々なコミュニティを活性化させる活動を展開している。

特定のスポンサーを持たない日本フィルがこれらの活動を充実させるためには、経済基盤を安定させることが最重要課題である。このため基礎収入の増収、基礎支出の削減に努めるとともに、さらなる助成、協賛、寄付の獲得をめざす。

当団を支える法人、個人の支援システムは以下のとおりである。

法人：特別会員（寄付会員）、公演の協賛、楽団の包括的な活動協賛

個人：パトローネージュ（寄付会員）、協会員（寄付会員）、サポーター（会員）

収支予算書(正味財産増減予算書)

自平成30年4月1日 至平成31年3月31日

(単位:円)

科目	予算額	前年度予算額	増減	備考
I 一般正味財産増減の部				
1 経常増減の部				
(1)経常収益				
基本財産運用益	(0)	(0)	(0)	
基本財産利息収益	0		0	
事業収益	(1,279,561,944)	(1,183,483,470)	(96,078,474)	
受取補助金等	(46,000,000)	(35,000,000)	(11,000,000)	
受取助成金収益	46,000,000	35,000,000	11,000,000	
受取寄付金	(132,000,000)	(153,400,000)	(-21,400,000)	
寄付金収入	132,000,000	153,400,000	-21,400,000	
その他	(5,000,000)	(5,000,000)	(0)	
受取利息	50,000	50,000	0	
雑収入	4,950,000	4,950,000	0	
経常収益計	1,462,561,944	1,376,883,470	85,678,474	
(2)経常費用				
事業費	(1,369,961,944)	(1,282,753,470)	(87,208,474)	
管理費	(92,600,000)	(94,130,000)	(-1,530,000)	
経常費用計	1,462,561,944	1,376,883,470	85,678,474	
当期経常増減額	0	0	0	
2 経常外増減の部				
(1)経常外収益	0	0	0	
経常外収益計	0	0	0	
(2)経常外費用	0	0	0	
経常外費用計	0	0	0	
当期経常外増減益	0	0	0	
他会計振替額				
当期一般正味財産増減額	0	0	0	
一般正味財産期首残高	131,944,125	100,740,917	31,203,208	
一般正味財産期末残高	131,944,125	100,740,917	31,203,208	
II 指定正味財産増減の部				
受取寄付金	0	0	0	
受取寄付金				
受取運用益	0	0	0	
受取運用益				
一般正味財産への振替額	0	0	0	
当期指定正味財産増減額	0	0	0	
指定正味財産期首残高	0	0	0	
指定正味財産期末残高	0	0	0	
III 正味財産期末残高	131,944,125	100,740,917	31,203,208	